
すべてが初めてだった。。

日生 陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すべてが初めてだった。

【Nコード】

N2156A

【作者名】

日生 陽

【あらすじ】

桜坂千衣は母親と二人暮らしの高校1年生の少女だった。しかし、幸せに暮らしていた千衣に突然の不幸が襲いかかる。母親の死だった。そこに一人の青年がやってきてこう言った。「俺は君のパパだ」死んだはずの父親がやってきた？一体どういうこと？！千衣のめくるめくる日々の始まりだった・・・。

初めての出会い

【第一部】

私はこんなことが起こるなんて想像していなかった。

一緒に笑った。

相談もした。

そして・・・知った。

いまさら言われても困るの、私はあなたを許せなくなってしまった。

そう、すべてがはじめてだったの・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

お母さんが死んだ。

連絡をもらったのはケーキを買って家に着いた直後だった。

ケータイを持つ手の平に汗が滲む。

イタズラ電話かと思い、電話を切った。

（　　）

鳴った、

お母さんが大好きだった「さくら」だった。

お母さんからの着メロだった。

二度目の着信だった。

「もう、お母さんってば驚かさないでよ・・・」
私の声はかすかに震えていた。

そつだよ、お母さんが死んだのに“お母さん”からかかつて来るはずないじゃん。

「さくら」は鳴り続けている・・・。

心を落ち着かせて私は次の言葉を用意し、ケータイに出た。

「もしもし？お母さん？もう、悪ふざけはやめてよね。本気に

「本

気だよ」

男の人の声がした。

「いたずら電話でもなんでもない。これは現実なんだ、証拠に俺が君のお母さんの携帯から電話している。早く来てほしい。病院だ。」

私は返事が出来なかった。数秒の沈黙がながれる。

「おい？聞いているのか？気持ちには分かるが、君は祥子さんの唯一の肉親だろう？！」

祥子さん・・・？

あ、

お母さんの名前だ。とにかく、イタズラ電話だとしても相手を確認めないと・・・。

私は小さく返事をしてケータイの電源を切った。

財布と鍵をにぎりしめ、玄関を飛び出した――――
もちろん、保険証も忘れなかった。

タクシーに乗り、病院に着いた。

玄関には男の人が立っていた。

ケータイを持っていた。

「君が桜坂千衣だね？」

何の疑いもなく、彼は私に話しかけてきた。

私は小さくうなづく。

「来なさい」

私はただ、彼に着いて行っただ。

エレベーターが地下へと向かう。

気づいた時、私の目には“霊安室”という文字が書かれた表札が写った。

嘘だ……。違う、この人、道間違えたんだ。

迷ったんだね、早くお母さんの所に行かなくちゃ、急がないと、ドアが開かれた。

男の人が私に白い布をめくれと言っている。

私は白い布をめくった。

お母さんだった……。

悪い夢なら早く覚めてほしい。私は漫画のようにホッペをつねった。痛かった……。すごく痛かった。

涙が止まらなかった。

お母さんは私の唯一の肉親だった。お父さんは私が赤ちゃんの頃に死んだとお母さんから聞いた。お母さんとお父さんは駆け落ちしたらしく、両方とも家から勘当されたらしい。

私は寂しくなんてなかった。お母さんがいたから。。

でも、そのお母さんがいなくなった。

ひとりぼっちになってしまった。

ねえ、どうして私をおいてしまったの？

誰か教えて…………。

ひとりは寂しいの。

「君、大丈夫か？」

誰？

「家まで送ろう。君の家はどこなんだ？」

やさしい声だ。

まるでお父さんみたい。覚えてないけど。

彼はしゃべり続けた。

「もし、よければ俺と暮らさないか？」

・・・はい？

「君の肉親は祥子さんだけだったはずだ。なら、これから色々大変だろうし。」

なんで、知ってるの？

「今日、俺の家に泊まってよく考えてくれ。」

泊まる・・・私が？

「じゃあ、ごはんを食べて帰ろう。」

私は重い口を開いた。

「あの、あなた誰ですか？」

私の隣に座る、見た目21歳の男はこう言った。

・・

「ああ、俺か？君のパパだよ。」

初めての会話

私の隣には見た目21歳の男が座っている。
この男はいきなりこんなことを言ってきた。

「俺？君のパパだ。」

私はこの言葉を聞いた瞬間、気が遠のくのを感じた……。

バタッ！！

「お、おい！大丈夫か？！おぅい……」

私は上から聞こえる透き通るようなハスキーボイスに耳を傾けながら、混沌の闇に身をゆだねた。

叫び声が聴こえる。

「もう、お母さんなんか知らない！いい加減にしてよ！私、再婚なんて認めないから！！」

私の声だ。そうだ、急にお母さんが私に再婚するとか言い出した……。その頃はお母さんの言ったことが理解できなくて、泣きながら叫んでたっけ。子どもみたいに。

そしたらお母さん、すごく困ってた……。で、それからお母さんは私と一言も交わさずに会社に行っちゃった。なんだか、悪い気がして今日来るって言ってた再婚相手のためにケーキを買ってきたんだっけ。

あたし、お母さんとケンカしたままだ。

お母さん。ごめんね、ごめんね……。

頬に冷たい水滴が流れ落ちた。

目を開けると、そこには真っ白な天井があった。とても明るい。

「うーん。」

とりあえず、伸びをした。

なんだ、全部夢だったのね。あはは。

ガチャ

「あ。起きたのか？」

ドアには黒髪で、直毛、鋭くもやわらかい二重の瞳、鼻梁の通った鼻、足なんてこれ見よがしに長い。

声はもちろんハスキーボイス。

はあゝ世の中にはこんな人がいるんだなあ。

「ん？どうした？」

その人は私に笑いながらそう言った。

笑顔もすてきだあ。

ん？ちよつと待てよ・・・なんで私の部屋に男の人がいるの？

お母さんは？

あれ？？

ここは・・・どこ？

「き、き、きやあああああ！！！！」

行動が脳に追いついた時、私はギャラドス級の叫び声をあげていた。

「あ、あなた誰ですか？！どうして、私の部屋に勝手に入ってるんですか？！一体何がどうなって？？？！！！」

「まあまあ、落ち着いて。ここはね、俺の家。」

へえゝ、この人の家かあ。なら問題ないね。

・・・え！なんで私がこの人の家にいるの？！

why?!

「あの・・・どうして私はここにいるんでしょうか？」

「ああ、君が病院で急に倒れるから、家に帰そうにも場所がわからなくてね。で、仕方ないから、俺の家に連れてきたってわけ。どう？ナゾは解けた？」

・・・つまり、私、知らない男の人と一晩を共にしちゃったわけ？！

ガーン・どうしよう。このままじゃ、お母さんに顔向けできない……あ。

そっか。お母さんもういないんだ。

「朝ご飯用意したから、食べるよ？」

その人はそう言つて、やさしく頭をなでてくれた。

まるで、心が読まれてるみたいだ。

「あ、もう1つの質問に答えてなかったな。俺は何度も言うようだけど、君のパパだよ。」

「……すませんが、おいくつですか？」

「ああ。21歳だよ。」

この人は、それがさも当たり前かのように答えた。

ドスンッ

私は驚いたあまり、ベッドから落ちてしまった。

「大丈夫か？」

この人が私の“パパ”？つてことは、5歳で私を生んだの？！

「ああ、言い忘れてたけど、俺、実父じゃなくて義理父だから。」

「……つまり、この人！お母さんの再婚相手……？！」

「あ。そうそう、面倒だったから、引越し屋さんに頼んで、荷物全部こつちに持つてきてもらったから。これからはパパと二人暮らしだな、ちい。」

“パパ”はやけに嬉しそうだった。

私、桜坂千衣さくらば ちいは今日から歳の差5歳の“パパ”と一緒に暮らすことになりました。はてさて、どんな日々が待っているのやら……。

パパは紳士

仕方なく、家に帰ることもないまま3日が経った。学校は3日間休むことにした。つまり、私は今この人と同居中である。

この人っていうのは、私の“パパ”のことだ（いかにも疑わしい）、

名前：いちのせ一瀬 あきゆき明雪 本名がどうかかわらない。

年齢：21歳

性格：優しくて紳土的 とてもパパには思えない

容姿：キアヌ・リーブスも恐れをなす美貌

好きな食べ物：コーヒ―牛乳プリン

これが、私の知ってる“パパ”情報だ。勿論、この3日間で入手した。

そして今、新たな情報が“パパ”プロフィールに刻まれようとしている……。

「おはよう、ちい。今日から学校だが、大丈夫か？」

朝食の最中、朝から100万ボルトの笑顔を向けながら“パパ”は聞いてきた。

まあ、父親っぽい発言といえばそれまでなのだが、なんだか違和感がある。

今まで父親がいなかったせいだろう。

「あ、はい。大丈夫です……。こちらこそ、仕事を3日間も休んで頂いて申し訳ないです。」

「アハハ。そんなに固くならなくてもいいよ。親子なんだし、これからその口調じゃ疲れるでしょ？」

あゝ。これからやつぱ一緒に住むんだあ……。

なんか、微妙な心境だ。

最近はお父さんが離婚してもカッコイイ“パパ”なら許せるっていうか、

そっちの方がいい！っていう子どもが増えているらしいが、実際そうやってみると案外ツライ。

「そうだ！学校でなにかあったら、パパがすぐに助けるから」（わざわざ強調しなくても、この3日であなただが私の“パパ”だっことはわかりましたから！っーか、助けるってどうやってだよ・・。）

と、私は心の中で毒づきながらも曖昧な返事をした。

“パパ”は得意げだった。

「じゃあ、行ってきます・・・。」

「はいはい。いつてらっしゃい 頑張れよ」

私の学校は有名な進学校で生徒は様々な地域から学校に通う。電車やバスを使い、長い人で片道3時間かかったりする。まあ、私もそのうちの一人なのだが。いつも、学校の最寄駅で親友のマナと約束している。たまに、家が近くにあるオタケが家まで迎えに来てくれるので一緒に行ったりするが、今日は見当たらなかった。

よく考えてみると、私はこの人の実の娘じゃない。いくら自分が愛した人の娘でもここまで父親らしく振舞うものだろうか・・・。疑問が残る。いわば、私はあの人にとって異性の他人だ。年も近いし私だってそれなりの意識はするし、もしかしたら・・・って思うときだってあるのにあの人は何もわかっていない。っていうか、たかが16歳の小娘にそんなこと心配されても、あの人が可哀想なのかもしれない・・・。せつかく優しく接してくれてるのに。これから唯一の家族になるんだし・・・。私は途端にひどい罪悪感に見舞われた。

「うん・・・これからはもっと親子らしく接してもいいかもしれない！うん、それがダメならあの人のことはお兄ちゃんって思えばいいわけだし」

私は一人で喋っているのを承知で大きな声を出して弁解した。言わずにはいられなかつたからだ。でも、その後、私が街中で一人訝しげな視線を他方から向けられたのは言うまでもないだろう・・・。

.....

電池時計の電子音が鳴り響く。だが、この家の主は微動だにしない。ずっとソファ―に座ったままだ。

「さてと、ちいも学校に行ったことだし、俺も本職に戻りますか。っていうか、まさか俺がパパになるとはね。運命ってどう転ぶかわかったもんじやないな、ま、ちいちゃん可愛いからいいけどね。“ちい”かあゝ久々に楽しめそうだな。」

男は不敵な笑いを浮かべた……。

パパは紳士（後書き）

こんにちは。初めまして！やっと次話投稿の仕方を理解した日生です。まだまだ未熟な点ばかりなので、もしよろしければ、改善すべきところを書いていただけたら嬉しいです！宜しくお願いします。

パパ情報追加

「おはよう、サー。」

「あ、おはよう、マナ。」

「今日から、学校来れるようになったんだ、よかったね。」

「うん。」

「やっぱり、サー顔色悪いよ？大丈夫？」

「あゝ、これは大丈夫。なんか、お母さんの再婚相手がすごく苦手で・・・。」

「そういえば、サー、お母さんが再婚するのメツチャ反対してたもんね。で、そいつ、サーになしてくんの？いつも、元気しか取り柄の無いような、サーをここまで追い詰めるんだから、相当なことしてくるんでしょう？」

「元気しか取り柄が無いっていうのは余計だよ！うゝん、別に何をしてくるってわけじゃないんだけど、っていうか、逆にメツチャ紳士で対応に困るんだよね。」

「えゝ。紳士なの？ならいいじゃん。あたしはてつきり、嫌味なおっさんかなって思ったから。」

（それがよくないから、こうやって疲れてるんだよ。。。）

でも、さすがにキアヌ・リーブスも恐れをなす美貌を持った21歳の人がお母さんの再婚相手で、ましてや、一緒に住んでいるなんて口が裂けても言えない。大親友のマナにでも！

「あゝ、そうかも。」

「ホントに覇気がないなあゝ。あ！オタケだ！オタケ！おはよう！！」

「おゝ。おはよゝ。あれ？サック元気ないだよ？」

『だや』って語尾につけるのはオタケが動揺した時の癖だ。ちなみに、私のことをサックと呼ぶのには何かポリシーがあるらしく、なかなか変えてはくれない。サーかサックのどちらかにしてくれ！！

「ほら！オタケも同じこと言ってる。ね、サー？保健室行った方がいいんじゃないの？」

「・・・うーん、行つてこようかな。ごめん、マナ。先生に連絡して。じゃあ。」

私は特にしんどかったわけではないが、色々考えることが多すぎたため、保健室で寝ながら考えることにして、1年3組の靴が並ぶ棚の前でマナ達に別れを言い、保健室に向かった。

「ねえ、オタケ、いいの？保健室まで、サー連れて行かなくて。マナは口調を少し落ち着けた。」

「？」

オタケの方はさも分らないといった感じだ。

「まあ、あんたらはオトボケコンビだからね。まあいいさ、あんたが気付くまでは多めにみてあげる。」

「あつそ、そりやどーも。」

「つていうか、オタケあんた態度変わりすぎ・・・。」

「勝手に言つとけば？」

「ええ、言つときますよ。もつとあんたらを刺激する出来事が起こればいいのにね。」

「・・・。」

（やっぱり、同居自体がヤバイのでは??）

一度決めたことにもう一度耳を傾けるのは案外面倒くさい。

そんな疑問をうつらうつらと眠りかかっている私に何度も問いかけていたところ、急に走る足音が聞こえた。何度も。

さすがに変だな、と思った私が見上げた先にあったものは、オタケの顔だった。

「!!!!!!!!!!」

「なんだよ。そんなに驚かなくてもいいだろ？せつかくいいニュース持ってきたのに。」

「何？いいニュースって？」

「それは・・・あ！ほら、あそこ。見えるだろ？あの人だよ、いいニュース。」

あの人だよと言われても視力が0.5の私には見えない。あんたは、2.0だから見えるだろうけど！

「あ、近づいてくる！じゃあ、俺見つかったらヤバイから、今授業中だし。もう帰るわ。じゃあな、サック！」

「え！ちよつと待ってよ！何がどうなったの？！オタケ~~~~~！
！」

オタケはそんな私を置いて自分のクラスへと戻って行った。だいたいい、オタケはなんのためにここまで来たのだろう。オタケはナゾすぎる・・・。まあいいや、とにかく寝ながら考えよう。昨日も色々考えすぎてあんまり寝れなかった。

コツコツ・・・コツ

足音が私のベッドの前で止まった（ような気がした）。

「ダメじゃないか、ズル休みは。」

そのセリフの持ち主は私の肩を撫でながら言った。この声はもしかしても、あの人は今仕事のはずだし。他人の空似だ！

耳元に息がかかった。

「んっ」

こしょばくて、思わず声をあげてしまった。

（しまった！）

時すでに遅しだ・・・。

「なんだ、起きてるんじゃないか。」

ミシ・・・

「俺は、仮病は認めないぞ。」

ベッドには体重が加わった音がした。

声が近い。頬に息が当たる。きつと顔のそばで言っているんだ。

「仕方ない。俺も昨日は全然寝てないから、添い寝してアゲル」

布団の中に空気が入る。枕にも、重みがかかる。

「こ、困ります!!!」

私は布団を跳ね除けて抗議した。目を横に向けるとそこには・・・いた。

「!!!」

「えゝ、なんで困るの？だって、俺達親子だろ？」

「!!!？」

「まあ、これからは仮病も出来ないって思ったほうがいいよ？」

「!!!??？」

「驚くのも無理ないと思うけど、朝言ってたでしょ？俺。」

「!!!????」

「ほら、『学校でなにかあったら、パパがすぐに助けるから』って。」

「!????？」

「まだわかってなさげだな。」

「??????？」

「いいかい？ちい。まだ、俺の職業を教えてなかったね。実はパパ今日からこの学校の保健医なんだ。」

「!!!!!!!」

名前：一瀬 いちのせ 明雪 あきゆき 本名がどうかかわからない。

年齢：21歳

性格：優しくて紳士的 とてもパパには思えない。

容姿：キアヌ・リーブスも恐れをなす美貌

好きな食べ物：コーヒー牛乳プリン

職業：私の学校の保健医

たった今、新たな情報が“パパ”プロフィールに刻まれた・・・。

パパ情報追加（後書き）

こんにちは。今回は友達も出演させてみました。まだまだ、前半中の前半なので、どうか、次話までお待ちください。宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2156a/>

すべてが初めてだった。。

2010年10月28日04時36分発行